

---

# 頼光老いる

くまごろー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

頼光老いる

### 【コード】

N9259C

### 【作者名】

くまごるー

### 【あらすじ】

年寄りの友情みたいなもののスケッチ。

(一) 貧乏暮らし

いきなりでなんだが、何が大変だつて、世の中に「思い違え」く  
れえ酷えもんはねえぜ。なつ、なんでえ、その目はよつ？ 一膳飯  
屋のお光ちゃんの話じゃねえよ。ふつ、今さら若え娘に厚遇てえ年  
齡でもあるめえ。腹と口とは違うだらうつてか？ 乃公だつて世  
間並みの分別盛りだ、口じゃそう言うさ。今日はまつとマジな話さ。  
坊主が言うんだから間違えねえところだらうが、人間何をやって  
も死ぬときにや後悔するらしいぜ。それがわかつてたら後悔しねえ  
生き方をしたらいい、つてか？ おめえも口が減らねえね。発心通  
りに事が運びや苦勞なんぞねえやな。それができねえのよ、人間て  
なアな。

「他人から後ろ指さされちゃなんねえ。お天道さまに顔向けでき  
ねえこたアしちゃあなんねえ」これが親父の口ぐせだよ。それを親  
の戒めと後生大事に生きてきてよ、その拳げ句が、死につ際まで口  
惜しい思いをするつて言われちゃ堪らねえよ。

考えてみりや、人並みだ、常識だつてのを訳もわからず鵜呑みに  
してきたな。だつて、しち面倒くせえ事をいちいち考えちゃいらん  
ねえだろ？ みんなのやるようにやつたらいいつて、考えもしなか  
つたさ。女房子供におまんまを食わせにやらねえ。下手あぐずぐ  
ず考えてる間にや身体動かしたほうが早え。仕事の段取りだつて、  
先を考げえるよか始めちまうのが先だあ。乃公はそうした性分よ。  
踏ん切りつけて始めちまえツ、つてな。

でもよ、矢張り仕事途中での捌り具合は気になるのさな。後か  
ら始めた仲間の方が捌つてることがある。これが間尺に合わね  
え。俺ア、頭を下げた聞いたぜ。するつてえと連中の言い種は「熊

公は段取りが悪い」と、こうだ。こちとら気が短けえ。段取りなんぞ考げえてる日にゃ、やつつけちまつた方が早えと思う。んでそう言つてやると、そこが俺のバカなところだつて言いやがるのさ。教わつた通りにやつてみるてえと、なるほど捗る。それでもまだ連中の方が早え。俺だつて職人の端くれだ。頭ア下げたかあねえが、その頭をまた下げた。すると今度ア「その都度てめえで考げえろ」ときやがつたよ。なるほど頼るばかりじゃいけねえからそうするしかねえと思つたさ。そんなこんなで考えるクセが身についたときにや迷うクセも身についちまつたつてワケだ。まつたく宜いような悪いような、なア。

ああ、簡単な仕事のとときアいいんだ。でもよ、ちよいと混み入つて来るてえと乃公の頭じゃ埒アあかねえ。だからつて他にやりようはねえやな。腕が悪くたつて女房子供を干上がらせる訳にや行くめえ？ でもなア腕じゃねえのよ、この節の仕事はよ。機械が乃公の仕事をやつちまいやがる。「現場合わせの熊」と呼ばれて些つたア知られたもんだつたがよ、こんぷゆーたで材料に狂いがねえから昨日今日の素人みてえな職人にも造作なく出来ちまう。だれもができる仕事じゃあよ、お給金たつて知れたもんさア。

性格が運命になるつてなア真正だな。せつかちな乃公は「見切り発車」で仕事を始めちやあ、後になつて「段取りのつけ直し」だ。段取りをそこそこつけて、また見切り発車。ふたつつの間を行つたり来たり。鉄骨が入る、つーばいほーになる、仕事がどんどん若え衆向きになる。気がついてみりや頭ア禿げてるしよ、つたく堪んねえぜ。

稼ぎの少なえ職人の家なんて惨めなもんだ。恥ずかしい話だが、娘はおつかしな若え衆とくつつくわ、セガレは学校サボりやがるわ。家中アギクシャクの我他彼此だア。今日の餓鬼どもア親の意見なんぞ聞きアしねえ。嬢アは「アタシらがあんなに育てちまつたんだよ、仕方ないないじゃないか」つて泣き出すしさ。家が気がかりでも仕事にや出なきやなんねえ。ああ、貧乏人に張り合いも何もあ

るもんかよ。

楽しみ？ カラオケだ。たかが知れてらア。それだつて交際つきあひが悪いのなんのと仲間なかに言われながらよ、嬢ぢやうアから釘くわさされて、三度に一度は義理ぎり欠く始末はつまつさ。バカ娘ななめなら尚なほのことマトモに嫁よめに出さいにやなんねえ、セガレにアちゃんあちゃんと学校がっこう出てもらいわにやなんねえ、老後らうごの蓄たくわえ？ そんなのがあるもんかよ。はあ、貧乏ひんぱふだけアするもんじやねえなア。

夫婦生活ふうふせいふ？ シヤレた言い方いひかたするね。止めよう、鬼おにが笑わらう。乃公おれがしかけると嬢ぢやうアは逃げ回まわる。更年期こうねんきだてえが、あんなもんを何年なんねんがかりでやつてるんだか。あれだけ好きで腰こしが抜ぬけるほどやつたもんをよお。貧乏ひんぱふ人ひとにや女郎ぢやうらう買かいなんてえ豪気ごうきなこたア縁ゆかりがねえやな。

## (二) 死の間際

乃公おれたちから見みりや、あんならア余剩あまり銭ぜにがくるような生活せいふをしてるよ。それでも不足ふそくだつてかい？ 吃驚おどろたね。人間の欲ほつてなア際限さいげんのねえもんだてえが、成なる程ほどなア。器量きりやうもそれぞれ、悩みなやみもそれぞれ。てんでんばらばらでも死ぬしぬときやだれも同じおなじだつて言いつてたな。坊主ぼくしゆの名前なまえ？ 忘れわすれちまつたけどよ、話わの中身なかみはちゃんと書き付かけてあるよ。聞ききてえかい？

あんだ、生年月日せいねんげつじつはいつだね？ ふうん、で、没年月日ぼつねんげつじつは？ いや串戯くしだんだよ、あつはつは。生まれうまれたんだつて周しりが何時いつい何日いつかつて言いつたのを鵜呑うのみにしてるだけだろ？ だれだつてそんなことアわかりつこねえんだ。生まれうまれて来たきたのも確たしかか死しんでいくのも確たしかかだけど、ぼんやりした生年月日せいねんげつじつと没年月日ぼつねんげつじつの間ましきやあ生きられねえ。だれも彼かれもそれぞれ事情じじやうを抱かかえてさ、思い通おもりにならねえ人生じんせいを送おくつてたア言いつけどな、真正ほんじつのところはどうなんだか俺おれにやわからねえ。いや、仕事しごとならよ、段取だんとりりのつけ直しなほしをしながらでも形かたちにして行きいきやあ宜いい。それが一生いっせいとなると一回いちどこつきりきりで仕切しきり直しなほしもねえ。気がつきいたときときにや過あやぎちまつてるのが人生じんせいなんかな。

乃公おれア別に何を信心しようてんじやねえがよ、ここんとこ町内でヤケに弔くわいえが続きやがってよ。普段なら坊主の戯言たわごとなんぞ聞く暇あアねえがな、こう次から次へじゃ、いつなんどき乃公おれの番が廻まわって来ても不思議はねえ、ふとそう思おもって坊主の話はなしを聞きくてえと、こうだ。これだ、これだ。なに？ 字あざが下手うだ？ 大きなお世話せわだ。仮名かばなばかりだと？ ぶん殴うるぞ。

……あやまりといふはほかのことにあらず すみやかにすへきことをゆるくし ゆるくすへきことをいそきて すきにしことのくやしきなり そのときくゆとも かひあらんや……

どうでい？ 坊主が言うにやあよ、年がいつてから何にもしねえで待つてゝも、来客きやくア死神しにんだけだとさ。年老ねんじやういるつてのは若わかえもんの墓場むらばを見るだけのことだつて言いやがる。乃公おれアゾクツとしたね。若わかくたつて、そりや死ぬよ。「あの若わかさで勿体むたいねえ」が決きまり文句ぶんくだ。そんなお悔くわいやみを言いつてる人がどうかてえと、金持かねもちちや金持かねもちなり、貧乏ひんぱん人は貧乏ひんぱん人ひとになアんにもしちやいねえな。死神しにんアいきなり大鎌おほいで首くびを掻かつ切きるてえぜ、死ぬしぬつてなア待まちつたなしだ。「一体いつてい乃公おれは生きてる間に何なにしてたんだ」つて悔くわいいの中で人は死しんでいくね、あつちこつちで、そりやあもうバタバタと。やり直なおせねえんだから悔くわいんだつて始はじまらねえさ。後悔くわいごしねえであの世よに行いけりや仕合しあわせだらうがな。

臨終らいまわの際ときにや一瞬いつしゆんで一生いっしやうを振り返かえるてえじゃねえか。懐なつかかしい思おもい出いでが走馬灯そうまとうのみてえに、なアんて言いうけどそんな悠長ゆうぢやうなもんじやねえらしい。「乃公おれこそは後悔くわいごなんぞしねえ」と強つよがり言いうやつもいるが、果た果たしてどんなもんだかな。みんな痛烈いたれつな後悔くわいごン中ちゆうでもがいて苦しんで死しんでいくんだらうぜ。なア、死ぬしぬてえと、念ねんはあるのに身体からだが無なえんだ。いたわつておきやよかつたものを便利べんりに使つかつてた身体からだが無なえ。身体からだ、欲ほしいだらうなア。だれだつてこの世よに未練みれんを残のこしながらあの世よに連つれていかれるんだ。思おもい違ちがいをしてたばつかりに、やり残のこしを沢山たんとこさえてなア、後あとろ髪引かみひかれながら死しぬんだらう？ 幽霊ゆうれいになつてでもこの世よに戻かえつて来きてえのが人情にんぢやうだらう？

思い違えさえしなけりやよ、悔いなんぞあるわけねえ。思い違えてなア酷えもんだよ。

……通りと言ふは他の事に非ず。速やかにすべき事を弛くし、弛くすべき事を急ぎて、過ぎにしことのくやしきなり……。自分が死ぬなんてこれっばかりも思っちゃんなかつたさ……。坊主の話聞いて、成仏できる自信が悉皆無くなつちまつたのよお。冥界あいつちに居たたまれずによ、嬢アや子供んとこへ飛んで帰つてきちゃあ、世話アかけるような気がしてなんねえ。四十九日しじゅうくにちなんてあつと言つ間だ。あんたア、成仏の自信はおありかい？

### (三) 吉公

同じ長屋に吉公つて中学つからのダチがいてな。いい腕してたんだ、時計職人。それがよ、今じゃバツタ屋で千両も出しゃ でじたるこーつ が買える。仕事がなくなつちまつたのさ。吉は無理を承知でタクシーの運チヤンになったな。同居の婆アにカスミを食わせるワケにもいかねえだろ？ それもな、時代だし世の中だつたんだなア。不景気で客足ア遠退く一方で……。吉の野郎、無理しやがつてよ、とうとう体ア壊したな。吉の野郎がタクシーを鹹首くひくになつたのを潮に嬢かかアの女あまが逃げやがった。薄情じゃねえか、人三化七にんさんばけしちめ。それを吉は「あんなもんでも余所よそで拾われて先が幸せになるんなら……」だだよ。如来さまなのか意気地がねえのか、つたく分んねえよ。婆アさんと二人で干涸ひからびてお迎えを待つてるみてえなことを云いやがるのさ。何の役にも立っちゃんねえ自分にも腹立つしなア。何度か憂さ晴らしをやったけどな、吉のやつア泣き上戸なんで始末が悪いんだ。湿っぽい。

「久し振りだア、熊ちゃん、ありがとよ。ありがとよ」

吉の野郎が昔の仕事をあんまり懐かしがるもんだから、そ、時計修理な。フツと思ひ出してポケットに手をやった。ちよいと珍しい広告よ。たまたま覚えていてな。てめえの頭の蠅も追えねえくせに

奴のことが気になってたんだな。《時計職人募集》だ。吉公にもやつとお天道さまが顔を突んど出してくれたのよ。スポーツ新聞の求人欄を見せてやった。ところが吉の野郎、「熊ちゃん、ありがと」を繰返すばかりで、少しも乗り気が見えねえんだ。眼ノ玉だけはさすがに皿みてえにして、火でも点くんじゃねえかってほど新聞を睨んでたけど、何しろ声が小せえ。蚊だつてもうちつと大声で鳴くだろうと思えるほど吉公の声ア小さかった。

「熊ちゃん、だめだよ。ローレックスなんかいじったことねえもの。今どき修理してまで使おうつてのは高級品だけだ。国産の自動巻までなら分かるけど……」

「何で、なんでえ。シケた面すんねえ。応募してみなきゃわかんねえだろ。吉よ、おめえにや立派な腕があるんじゃねえか。修理だつてろれくす とやらに限つたもんでもあるめえ」

するとまた「熊ちゃん、ありがと」だ。じれつてえんだよな。

就職？ だめだった。乃公<sup>おれ</sup>ア仕事を半日ひまもらつて吉につきあつた。あんまりじれつてえからいつしよに掛け合いに行つたんさ。するとさ、この時計屋の社長つてのが憎つたらしい口をききやがつたね。

「はア、ずいぶんブランクがありますねえ。技能検定は？」

いや、吉は素直だからな、でなきや婆<sup>ひから</sup>アと二人で干涸びやしねえやな。聞かれもしねえことを正直に言つちまう。こーつ にや自信がねえとかな。おう、長年の朋友じゃあるけどな、こんときやアイツの頭ア張り倒してやろうと思つたぜ。

「タクシー会社を辞められてからは？」

な、やなことを聞くヤツだろ？ 履歴書の就業期間が途切れてるなアそれなりの事情があるのによ。吉公は自分の子供ほどの社長からは聞きたくなかつたんだ。やな言葉だよなア。

「生活保護つてことですね？」

出ちまつたよ。吉公の引きつった頬つぺたにひとすじ光つた。

「熊ちゃん、帰ろ」

乃公おれ社長をぶん擲なぐるのを我慢するので精いっぱいだ。

「てめえなア、雇う気もねえくせに広告なんぞ出しゃがってッ」  
社長の顔には、貧乏人は盗っ人だ、そう判然はつきりと書いてあった。

「熊ちゃん、この人にだって家族があるよ……」

「わかった。おい、社長サンよッ、造作かけたなッ」

気分が悪いんで、できるだけ時計屋から離れて一杯やろうと吉を誘った。

「吉よ、人が好いだけじゃ食い殺されるぞ。嫌やな世の中だなア。  
さ、機嫌直しだッ」

「いいよ、熊ちゃんに御馳走ごちそうにやなれないよ、もう余計な散財は止めにしよ」

「つてやんでえ、乃公おれもおめえも江戸っ子だろッ。ぢきに三社さまじゃねえか。年アとつても元気を無くしちやなんねえ。なッ」

吉公を励ましながらも熊の心中は複雑だ。自分たちの祭りだった三社さまでも若え衆たちの視線に冷たいものが混じって来たのを感じているからだ。

熊の酌をコップに受ける吉の手が顫ふるえた。顫える手を駆け上った二の腕から背中一面に頼光の彫物。若い頃の念のいつた吉公の我慢だ。……なんで社長の前で脱いで見せなかった、吉よ……。

吉が肩に手をやってぼそッと言った。

「こんなもんでも質種しちぐになつてくれたらなア……」

……吉ッ、シャレにならねえぞッ。女房がいなけりや背負の頼光が順番だつてかッ。気概のねえ男の彫物なんざア間抜けな質屋だつて相手にしねえよ、籠棒かごぼうめいッ。乃公おれは損得で朋友を選んじやいねえぞ。おめえの肩アもつてカミさんの悪口も言ってきたんだ。けどよ、おめえがそんなこつちやあよ。吉公よりや二十はたちも若え頼光も、これじゃあ大きに老け顔になつちまつたろうぜ。おめえたアは長えつき合いだよ。これっからもおめえたア昵懇じつこんでいてえんだよ。おれたちや気が合うんだよ……

熊は吉に会うたびにじれったい思いにさせられる。それでも吉に会わずにいられない。「どうにかなんねえのか、じれってえなあ」は口ぐせだが、吉の性分だけでそうなる訳ではないことは熊も承知なのだ。

……若えときにひとつ思い込みや、後は手間が省けて好都合だとばかり思ってたが、フタが開くたんびに不都合になつてる。面白かアねえが他にどう生きられるもんでもねえ。じれってえのは吉だし、自分だし、世間なのだ。

「吉ッ、ぐっといけ、ぐうっと。何でい、ったく、じれってえなあ、もう」

そう言つて熊は吉のコップに「ほ」と酒を注ぐ。(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9259c/>

---

頼光老いる

2011年1月20日01時28分発行